

戦後日本の農村女性政策における〈農村女性〉の構築過程

-エンパワーメントの批判的検討を通して-

岩島 史

本論文は、「戦後」という認識枠組みのなかで高く評価されてきた農村女性のエンパワーメントを主体性の動員と捉え直すことを通して、農村女性のエンパワーメントを目的とする農村女性政策による〈農村女性〉の構築と、その構築に主体的に参与する農村女性自身の経験と主観性の相互作用を通して明らかにした研究である。

序章では、研究の背景となる「女性」というカテゴリーが一枚岩に「活躍」を求められる現状と、農村女性が「犠牲者」からエンパワーメントによって地域社会や農業生産の「救世主」になったと描かれる日本の研究状況が示された。続いて、政策による農村女性のエンパワーメントを、その対象となるべき〈農村女性〉の構築過程ととらえ、政策の実施のされ方と農村女性自身の経験や主観性の相互作用に着目する本論の分析視角が示されている。

第1章では、第二次世界大戦後の占領期に農村女性の地位向上と民主化を意図して開始された政策を「農村女性政策」と定義し、そのなかでも特に代表的な政策として生活改善普及事業と社会教育（婦人学級）をとりあげ、どのような理念と社会科学的知識のもとに農村女性にはたらきかけていたのかを検討した。生活改善普及事業は米国の家政学の影響を強く受けて開始され、あわせて農業改良局長の小倉武一の農民観がエンパワーメントの構図を明確に描き出していた。婦人教育は米国の女性史研究者の影響を受けて開始され、開始初期にはエンパワーメントや戦後啓蒙の思想と親和性をもつものであった。しかし高度経済成長期には文部省は産業人を育成する家庭の担い手として女性を動員する方向性を強め、他方でそれに反対する「権利としての社会教育」を主張する教育学者や運動家など複数の路線が生まれたことが示された。

第2章では、生活改善普及事業において、地域社会での活動を担った生活改良普及員がどのように「生活」を問題化し、〈農村女性〉のあり方を規定していったのか、生活改善普及事業によるエンパワーメントの実施のされ方が、生活改良普及員の活動事例集を用いて検討されている。1950年代には若い農村出身女性であることが多い普及員が農村女性に働きかける力よりも、農村社会が普及員を閉め出す力の方が強かった。しかし1960年代になると生活改良普及員は農村女性を「家庭」の枠内に引き戻そうとする働きかけを行なうことで、女性は「主婦」たるべきという意識を普及すると同時に、その領域であれば女性も

主体的に行動し、発言し、責任をもって担うことのできる力をもつものとして設定していたことを示した。

第3章では農村女性が政策からの働きかけの枠内においてどのように〈農村女性〉の構築に関与するのか、生活改善普及事業に参加した女性たちの体験記の分析を通して明らかにされている。農村女性の自己表象と主観性に着目することで、政策側の意図しない複数の〈農村女性〉が構築されていることを明らかにした。農村女性は、政策が設定する〈農村女性〉や社会の主流層の女性像を部分的に受け入れながらも、日常の労働や子どもとの接し方といった身体的経験を軸に、「母」としての役割・あり方を中心とする複数の役割・あり方を表象／代表していたことが示されている。

第4章では、文部省の方針に反対する社会教育の先進地であった京都府久美浜町を事例に、生活改善普及事業と社会教育による〈農村女性〉構築の相違と、農村女性がどのようにその構築に参加するかが、地域の固有性とそこでの労働、生活の経験に即して検討されている。久美浜町では生活改善普及事業も婦人教育も、嫁世代の女性を対象に展開された。1950年代には生活改善普及事業は台所や食の領域で、社会教育は農業生産の領域で働きかけを行っていた。1960年代には生活改善普及事業は農業労働を減らして家事時間を増やすこと、社会教育では家の農業・農地、「ふるさと」＝農村社会を維持し守る役割が女性に期待され、そのための政治的主体性や「自治意識」が求められたが、同時に「量」として動員される対象ともなったことを示した。あわせて、いずれの政策ともかかわらずに現金収入によって周囲との関係性を変化させていく女性たちも多くみられ、農村女性の側の複数性は1960年代に増大していることが明らかになっている。

終章では論文全体の要約とともに、農村女性のエンパワーメントにおける農村性と女性性の相互作用を論じている。また農村女性のエンパワーメントを戦後史のなかに位置づけることで、1960年代に農業・農村が弱体化することと、農業政策や社会教育政策の体制が整うことが、〈農村〉の担い手たるべき〈女性〉主体の成立を必要としていたことを示した。農村女性のがわの経験や主観性は1960年代にむしろ増大しているにも関わらず、エンパワーメントの言説ネットワークが、一枚岩の〈農村女性〉という集団があるかのように見せることで、〈農村女性〉のあり方を狭く限定するのみならず、過去・現在・将来の解釈も単線的なストーリーに限定してしまっていることを論じている。